

【電子かわら版 チャペル・アワー No.015】 2020年7月21日(火)

★今週の前奏：Beneath the Cross of Jesus - St. Christopher (リードオルガンの演奏で)

★今週の聖書：ヨシュア記 20 章 1-9 節 (旧約聖書です)

★今週の賛美歌：300 番「十字架のもとに」

★今週の後奏：KINGSFOLD, 編曲 by Justin P. Tokke(「讚美歌 21」  
432 番参照~歌詞と共に)

★今週の説教者：望月 麻生 牧師

もちづき・あさを。日本基督教団足利教会牧師・足利みどり幼稚園 園長。日本基督教団足利教会牧師・足利みどり幼稚園園長。最近はもんじゃ焼きの美味しい作り方を覚えました。



★ メッセージ：「逃れる場」

10 年ほど前まで、私は東京の郊外で暮らしていました。車よりも電車の方が生活に欠かせない、そんな環境でした。東京を走る電車は本数が多いから不自由しないと、都内に暮らし始めたときに私は思っていました。しかしそれは間違いでした。鉄道を利用するたびに必ずどこかで「人身事故」の知らせが電光掲示板を流れていきました。そして運転見合わせの多いこと。多くはその人身事故によるものでした。

人身事故とは、正式には「鉄道人身障害事故」と言います。列車の運転による人の死傷を伴う事故のことです。電車の電光表示板に「人身事故」という字が光ったら、どこかで誰かが列車によって怪我をしたか亡くなったかという意味です。「事故」とは言いますが、列車によって自ら命を断つ人も決して少なくはありません。最初は人身事故の多さに驚いていた自分も、慣れてくると恐ろしいもので、「またか」くらいにしか感じなくなってきました。「またか」と思っている自分がむしろ驚きでした。

終電で人身事故があったときなど、自宅の最寄駅から数駅手前で運転見合わせになってしまいました。私はそこからタクシーで七千円以上かけて帰らなければなりません。人身事故の当事者の方を悪く思っているといけないと自戒しつつも、多少腹立たしい気持ちになって、更に自己嫌悪。人身事故は誰も幸せになれません。轟然と特急列車が自分の前を通過するたび、ここに飛び込むなんてできないと私は思いました。でも、死にしか自分の居場所がなくなった人たちが、この続く線路の向こうに毎日いるのは事実だったのです。今年だって、きっと。

夏休みが終わりを迎える頃、図書館を初めとする公共施設が「学校に行きたくなかったら、ここにおいで」と、子どもたちに呼びかけているのをご覧になったことはありますか。Twitter などの SNS でも、いろんな団体が盛んに呼びかけています。あなたの逃げ場・居場所はここにあるよ、と。公共施設だけでなく、お寺や教会も子どもたちの逃げ場を提供するところは少なからずあります。心が追い詰められたとき、逃げて自分の命を大事にできる場があるのは、誰にとっても欠かせないことだと、いつもこの季節に思います。

私自身も相当不器用な人生を歩んできました。人間関係が絶不調であった中高生のとき、自分がどう生きていたらわからなくなった大学生のとき。でも、不思議と逃げ込める場所がありました。受け止めてくれる人がいました。だから、今もなんとかやられているのだと私は思います。

私はいま幼稚園の園長として働いていますが、幼稚園も子どもたちの逃げ込む場・居場所となりえます。特に今は長期休暇です。幼稚園の場合は保育園と違って長期休暇があります。保育が行われている時期は給食が確実にあるけれど、長い休みのときは 1 日何も食べ物を口にできずにいる子ども。親がまったく世話をしてくれずに何日も着の身着のままだった子ども……。それは当園の事例ではないにしろ、他人事ではありません。世の中全体を見渡しても、「家庭が一番

安全で心地よい居場所」という見方は残念ながら安全神話です。幼稚園がどのような場であったら良いか、そのためには何が必要か……そんなことを日々、私は園の先生方と試行錯誤しています。

皆さんには、逃げ込める場所がありますか？「逃げる」ことはマイナスのイメージを持たれやすい行動ですが、実はとても大切です。自分の命を守る基本的な行動だからです。何事も勇気をもって立ち向かったらカッコいいなんてことはありません。逃げる方が、勇気がある場合だっているのですから。逃げ込める場なんてない、と思う方もおられるでしょうが、誰にでも必ず一つは何かしらの逃げ場・居場所があります。

いつも幼稚園で子どもたちといるとき、彼らは様々な姿を見せてくれます。直接交わす会話だけでなく、行動や絵画表現などにも子どもの心は現れています。幼稚園にいるのは満3歳児から6歳までの子どもたちです。一般的に見れば小さな子どもたちですが、悩みや葛藤を、すでに彼らは様々な場面で経験しています。

わたしは幼稚園が職場となってから、下手なTVドラマよりもここでの毎日の方がよっぽど予想外でショックで先が読めないと実感しています。私は子どもたちの何倍もの時間を生きている者ですが、それにも関わらず時々こんなことを思います。「ああ、もし私がこの子と同じ悩みを持っていたら、私はこの子のように、この悩みと付き合っていけるだろうか」と。

子どもたちはすでに私にとって人生の師でもあります。自分の置かれた現実に対して、時には逃げて距離を置き、時には大人の助けを得て何らかのステップを踏んでいく、そんな子どもたちと一緒に居させてもらうことの責任の大きさ、そして恵みを私は日々心にかけています。

いにしへのイスラエルには「逃れの町」と呼ばれる町がいくつかあったと言われています。ヨシュア記20章には「意図してでなく、過って人を殺した者がそこに逃げ込める」場所であると書かれています(3節)。殺そうと思っていたわけではないのに誰かを殺してしまった人がいたならば、その人は「逃れの町」に逃げ込むことができます。町の入り口では長老と呼ばれる指導者が幾人かおりました。殺害者となってしまった者は、彼らに事情を説明しなければなりません。時には意図して人を殺めた者もいたでしょうから、長老らは逃げ込んできた者を見極める必要がありました。事情を話して受け入れられた者は町に居場所が与えられました。被害者の家族等が復讐をしにやっても、町は逃げ込んだ者をその人たちに引き渡さなかったのです。そして、然るべき時間を、逃げ込んだ者は「逃れの町」で過ごしたのです。そして時が経てば、もといた場所に戻ることができたのです。

それは私たちの想像を超えた世界です。けれども、「逃げる」ことが社会の大切な機能として備わっていたのは興味深いことだと私は思います。「逃れの町」に逃げ込んだ者たちにとって、偶然にしろ、誰かを殺めてしまったことは本当にショックだったろうし、取り返しがつかないことゆえ途方にくれて余りあったでしょう。どこにもいられなくなるようなことをしてしまった自分。聖書の中で神様が人に、逃げ込める場所を作るようにお命じになっていることは、見方を変えれば社会は、そのような人に居場所をたやすくは与えないということでもあります。

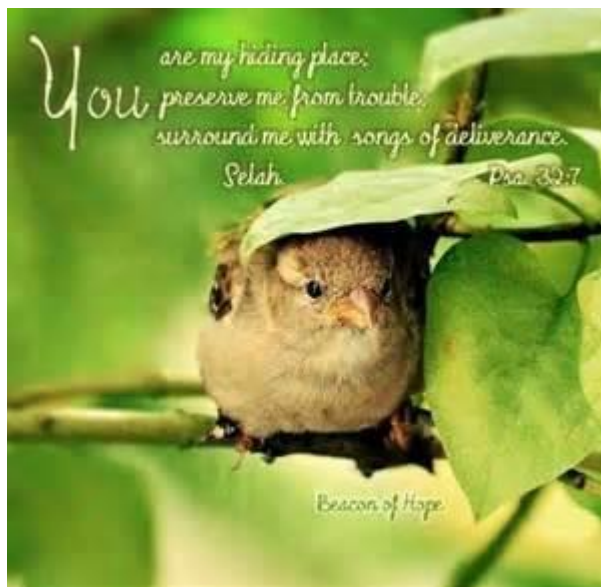
意図しない殺人に限らず、実際私たち自身にも、自分ではどうしようもない出来事は小なり大なり生じるものです。人間関係から自然災害に至るまで。現実というものは、それほど予想し難いものであり、重いものです。自分の人生なのに、自分で背負いきれないものは確かにあります。そしてそれは自分が弱すぎるからでも怠惰だからでもありません。

自分の置かれた現実、自分が持ちうるかぎりの力を持って、しっかり向き合うことも一つのあり方でしょう。けれども、「逃げる」ことも、立派で尊い選択肢です。「逃げる」ことは、神様に自分の人生を一旦全部預けることでもあるからです。

あなたの命を、神様はまるごと受け止めてくださいます。自分からすれば誰にも見せたくないことばかりの醜い人生に見えていたとしても、神様から見ればすべてが大切なものに他なりません。

将来のお仕事を通して、居場所を求める誰かを受け止める役割を担う可能性が大いにある、そんな皆さんと共に、私もいまできることを精一杯していきたいと思います。

【祈り】神様、私たちが「どこにも居場所がない」と感じた時も、あなたは私たちに「居場所」を示してくださることを忘れることがありませんように。そして、今、「居場所」を求めている人たちが皆、「居場所」を見出すことができるよう、私たちを用いてください。アーメン。



★今週の前奏：Beneath the Cross of Jesus - ST. CHRISTOPHER

後で歌う賛美歌 300 番の旋律を、リードオルガン（足踏み式の鞆オルガン）の演奏で。演奏に使われているオルガンは、Dominion Orchestral 社製で、1911 年ごろ、カナダの オンタリオ州で製作されました。

★今週の賛美歌：300 番「十字架のもとに」

詞：Elizabeth Cecilia Clephane (1830～1869)

クレーフェンは、イギリス・エディンバラで裕福な家に生まれましたが、彼女はその立場を、貧しい人たちや苦しい立場にある人たちを支援する働きのために大いに活用しました。この賛美歌の歌詞は、彼女の死後（1872 年）、雑誌 the Family Treasure に“Breathings on the Border”（「境界線上で呼吸する」）というタイトルで、無記名で投稿掲載されたもの。

曲：Frederick C. Maker (1844～1927)

メイカーは、1844 年、イギリスのブリストルで生まれました。ブリストルの英国国教会司教座教会で早い時期から音楽教育を受けましたが、メソジスト教会や会衆派教会のオルガニスト、また教会の音楽監督として、生涯ブリストルに留まって働きを続けました。

メイカーは、クレーフェンのこの歌詞のために、1876 年に ST. CHRISTOPHER を作曲し、クレーフェンの詞にメイカーの曲の組み合わせで、1881 年に出版された the Bristol Tune Book に掲載されました。

★KINGSFOLD, 編曲 by Justin P. Tokke (「讃美歌 21」432 番参照~歌詞と共に)

KINGSFOLD は、【電子かわら版 チャペル・アワー No.012】2020年6月30日(火)の前奏にも紹介したのですが、今回は、より小編成の管楽器(フルート、オーボエ、クラリネット、ホルン、バスーン)五重奏で聴きます。

KINGSFOLD はもともと、イギリスの民謡のメロディーであったものを、Ralph Vaughan Williams (【電子かわら版 チャペル・アワー No.012】2020年7月7日(火)の後奏で聞いた541番の作曲者)が讃美歌のメロディーとして採譜して使用して、いくつかの歌詞との組み合わせで愛唱されるようになったもの。「讃美歌 21」にも、432番のほかに、304番も。

今回は特に、432番の歌詞を味わいながら、後奏として聴きたい。